
暁の護衛～海斗の憂鬱

天音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁の護衛〜海斗の憂鬱

【Nコード】

N2506N

【作者名】

天音

【あらすじ】

海斗が麗華のボディーガードにふさわしくないと判断を学園が決めた。海斗は次の試験で高得点をとらなければならなくなってしまう……

プロローグ（前書き）

初投稿です。正直文章が下手なのでお気をつけ下さい。

この作品は海斗がもし本気を出したらというIFの話です。

なかなか本文の核心に入れないので、その辺は寛容な心で見てください。

プロローグ

プロローグ

「朝霧く〜ん、ちょっといいかしら?」

「……」

「もう朝霧君たら、返事してよ」

「……なんだ」

「あ、やっと返事してくれた〜もう先生さ……」

「うるさい、早く言ってくれ」

「もう手厳しいな〜、まあそうね率直に言っわ。朝霧君次の試験悪かったら、麗華さんのボディガード下ろされちゃうわよ」

「……は?」

「もーちゃんと聞いててよ、だから朝霧君は次の試験で高得点を取らなければなりませんーん」

「てめーなんでそのこと今までだまってるやがった。」

「だってー先生朝霧君のこと嫌いだしー」

「……ちっ」

このSSは誰のルートにも属しておらず、佐竹以外誰も海斗の実力を知りません。

プロローグ（後書き）

いきなりこんなのですいません。次回からはこの話を聞く少し前に戻ります。

日常（前書き）

いつもの日常様子です。

文章が変だと思えますが許して下さい。

日常

「・・・暇だ」身体を起こす。目の前には綺麗な庭が広がってるが、まあそんなことはどうでもいい。問題はこのオレが時間を持て余していることだ。

「くそ、全部ツキのせいだ」オレは一人で愚痴る。ついこのあいだ、いつも通りに廊下にある高そうな皿をフリスビーのように回していたら運悪くツキに見つかって罰として小説をすべてとりあげられてしまった。・・・オレはこどもか!・・・何を言ってるんだか俺は。まあ、ふざけるのはこのぐらいにして・・・

「あんたはいつでもふざけてるでしょ」と誰かが横槍を入れてきた。

「誰だ、勝手に人の心を読んでる貧乳お嬢様は!」

「分かってるじゃないの!」

ゲシッ!ゲシッ!頭と顔を蹴られた。

「いてーなー、事実を言われて怒るなって」

「あんたがそういうことを言うのを止めないからでしょ!」
ゴツ!顔を殴られた。

「ふいまふえん、ふあんふえいふいます」(すいません、反省します)

「何言ってるか、まるでわからないわ・・・」

「ふおまえがふあぐつふあかふあだふお！」（お前が殴ったからだろ！）

「はいはい、で、あなたはそこで何してたの？」

麗華が上から目線で見下してくる・・・実際立場などは上なんだけど・・・

「あ？見れば分かるだろ、ツキに小説取られてふて寝してたけど目が覚めて何するか考えてたんだよ」

「分かるわけないでしょ！」ゲシっ！また蹴られた・・・

「まあ、いいわ。つまりあんた暇でしょ？ならちよっと買ってきてほしい・・・」

「さあて、尊と熱い話でもしに行くかね。」

「あんたと宮川はそんな仲じゃないでしょ！」ゴツ！また殴られた・・・

「というよりあなたの逃げ口、日に日にしょぼくなってない？・・・なんてきつつい言葉を浴びせるお嬢様なんだろうか。」

「ち、ばれたか」

「何がばれたかよ、ってことであんた早くこないだの店で新しく入ったレコードをもらってきて・・・」

「さあつてかえる・・・」

「・・・見返りに本を買ってあげてもいいわよ」

「・・・ろつと思つてけど急に出かけたくなつたなー仕方ないからついでにやつてやらないこともないぞ」

「あんたつて本当に安い男ね・・・」

「ふん、いくらでも言え。俺は本のためなら何でもしてみせる」

「かつこよさそうなセリフだけど実際は可哀相なセリフよね・・・」
麗華は呆れ顔で言う。

「まあ、いいわ。じゃ後はよろしく」麗華は屋敷の方へ歩いていった。

「じゃ、オレも行きますか。」オレは本を買えるといううれしさを隠せないまま街へ向かった。

・・・

「まさか、なにわ探偵シリーズの新作が出てるとは・・・早く帰つて読むか」屋敷を出てから数時間後、オレは麗華と自分の買い物済み、上機嫌なオレは普通に屋敷に戻ろうとしていた。が、

「でさあ〜このあいださ〜・・・」「マジかよ〜」などと前から騒がしい連中が歩いてきた。知つての通りオレは面倒なことは嫌いだ。オレは溜息を一つし、自然に隣を抜けようとした時、

「あ?」肩に軽い衝撃を受けた。勿論相手は

「いってーな、何ぶつかって来てんだよ、あ？」さっきの連中であつた。オレは無視して歩こうとするが、

「どこ行くんだよ、ぶつかってといて謝りもしないのか？」と肩を掴まれた。・・・面倒だな。オレはその掴んだ手を払い、帰ろうとするが、

「おい、お前何無視してんだよ」と今度はオレのことを囲んできた。周りは見なかったようにする奴や、警察に連絡しようとしている奴もいる。・・・まずいな。これ以上騒ぎを起したら警察が来ちまう。はあ、仕方ねーな。

「おら!!!」オレは囲んでるうちの一人を殴り飛ばし走り出した。勿論奴らも追いかけてきた、目的地は出来るだけ人目が無いところ、オレは急いで目的地を目指した。

「遅かったじゃない。こんな時間まで何してたの？」と玄関で麗華に聞かれた。

「いや、本屋で何の本買うか迷ってな」と買ってきた本を麗華にみせる。

「ふーん。まあいいわ。それで頼んだはずのレコードは？」

「ああ、これだ」オレは頼まれたものを麗華に渡した。

「ありがと、じゃ夕食で」

「おう」オレは返事し部屋に向かおうとした・・・が

「そつえばさつき、あなたに似た人が不良に絡まれてた。つていう噂があつただけど・・・」麗華が探るような目でオレを見る。

「なんだそりゃ、オレはいい子だからそんなのに絡まれないつーのオレは適当に流す。麗華は溜息を一つ吐き、

「どの口が言うんだか・・・ならいいわ。でもかわいそうな子達ね、追いかけたはいいものの、逆に返り討ちに会うなんて・・・しかも全員病院送り。まったくどんな奴よって感じよね。」と麗華が呆れたように言う。・・・ちよつとやりすぎたかもしれん・・・ま、いつか。

夕食後、部屋に戻ろうとすると、

「あいやまたれや、その犬」と軽快に毒づく奴がいた。

「なんだ、そこのお嬢さん」

「え、なんか犬がしゃべつたと思つたらいきなりナンパされちゃつた~~~~」

「安心しろ、誰もお前なんかナンパしないから。」

「何言つてんですか、私も前は憐桜学園の生徒だったんですよ、もうモテまくりです。」

「まじで！！！！！！！！！」

「軽いジョークですよ」

「なんだよ、お前まじでびびつたじゃねーか」

「いえ、まさか信じるとは……」

「いいかお前世の中にはな、ついていい……」

「あ、私掃除なんで、じゃ」とツキはとてつもないスピードで逃げていってしまった。相変わらずすばやい奴め……

……

「……べ、別にさびしくねーし」そういいオレは部屋に戻った。

次の日からあんなことになるとは知らずにオレはそのときまで普通にすごしていた。

日常（後書き）

こんな日常で良いのでしょうか？

と書いてる途中に思いましたが暁の護衛をPLAYしてるとこんなのが日常でも問題ないと感じたのは私だけでしょうか？

日常2（前書き）

初投稿なのでどの辺を修正したらいいか感想などに書いてもらおうと
ありがたいです。

日常2

朝、いつものように目を覚ます。

「眠いな・・・」といいながら体を起こそうとするが、

「ちっ」というあからさまに悪態づいてる奴が隣にいることに気がついた。

「いつも言ってるが無断で入ってくるな」とオレは隣にいる自称掃除姫のツキに言う。

「え、朝起きてからはあはあすることが日課だから居ないで欲しいーうわーなんて汚らわしいこんなと同じ空気を吸ってると思うと吐き気がしますね。」

「朝から絶好調だな・・・」と溜息をつく。

「下の方が？」

「お前の毒舌がだ！」

「いやーそれほどでも〜」

「褒めてねーよ！」まったく朝からこのクールなオレを狂わすなんて・・・

「うわー自分でクールとか言ってるし〜これはもう駄目ですね〜」
「そう言いながらドアに向かう。」

「さて！変なことを他の奴らに吹き込むなよ！」

「ちっ、ばれましたか」

「・・・本当に隙が見せられねーよお前のは。」こいつに口論で勝つ奴をオレは見てみたい。

「あ、こんなことしているうちにもう朝食の時間です。朝食に遅れた朝霧海斗は朝食にありつけません・・・ちなみに後3分です」

「まじで！！」オレは急いで着替えて食堂に向かう・・・

「おい」オレは隣にいる馬鹿メイドに話しかける。

「はい」ツキは普通に返事する。

「何で誰もいないんだ」そう食堂にはオレたち以外だれもいない。

「そりゃ、まだ朝の4時だからですよ」ツキは平然と答える。

「・・・」おい、今なんていってこのアマ。朝4時だと、ふざんけんのも大概にしるよこら。でも確か・・・

「あ？でも部屋のとけ・・・」

「あ、私がすっかりと時間を変えておきました！」嬉々とした表情でいう自称掃除姫。・・・一回こいつ犯したほうが良いんじゃないかと思ってしまう。

「感謝どころか実際は恨みたいぐらいだがな……」にしたもその口調はどこかのツン貧乳おじよ……

「何か言ったかしら」「ゴツ！バシ！グシャ！……いや最後の効果音まぞくねーか？

「だから人のモノログ勝手に読むなよ……」かなりいいのをもらったせいかな、かなり顔が痛い。

「まったく、あんたは反省って言葉を知らないのかしら？」と呆れるように首を振る。

「いや、知ってるが使わないだけだ」

「分かってるわよ！」ゲシッ！また蹴られる。

「前々から思ってたんですけど、海斗って何されてもすぐ復活するところを見ると相当なMなんじゃないんでしょうか？」そんなやりとりをしていると、いきなりツキが爆弾発言をする。

「え、あんたってそういう性癖持ってるの……」と麗華に引かれる。

「持ってねーよ。つーかそれでもお前起きるの早くねーか？」めんどくさいのですねに話題を変える。

「まあ、私は早起きな方だから、大体この時間帯に起きるのよ。」

「ふーん、まあいつか。じゃオレも飯にするかな」とオレは席に座ろうとする。

「記憶にございませんな」

「それより今のでかなりの人がこっちを向いてるんだが・・・」それに気付いた尊は周りに謝ってから小声で話してきた。

「海斗・・・お前麗華お嬢様に何にもしてないよな。」いきなり尊は意味がわからないことを言い始めた。

「は？当たり前だろ、あんなちっこいのに興味ねーよ」オレは一蹴する。

「そうか、ならいいんだ。あんな夢を何故僕は見たのだろう・・・」と尊はぶつぶつと言っている。

「なあ、尊。オレもう飯食っていいか？」もうめんどくさくなってきた。

「あ、ああ。・・・そうだよな。麗華お嬢様が海斗とやってるなんて・・・」

「ちよつと待て、そのちっこいウィンナー野郎」とオレは尊の襟を掴んだ。

「なななな、何を言ってるんだ、き、貴様は!!!!!!!!!!!!!!」

「お前何の夢見たって？」

「いいいいいや、別に、かか海斗とれれれれれ麗華お嬢様がやってる夢なんて決して見てないぞ!!!!!!」いやもう十分だ。

「お前自分で言ったも同然じゃねーか」オレは呆れる。本当にこいつは麗華のことになると判断が鈍くなるな・・・

「くっ、海斗。貴様謀ったな！」尊が涙目になる。

「いやお前が勝手に自爆したただけだろ・・・」

「頼む、海斗だまってくれ！僕はどうかしてたんだ。最近海斗が麗華お嬢様と仲良くしているのを見て勝手に変な妄想をしてしまったんだ！」最近尊が崩壊してきている気がするのはオレだけだろうか。

「えーめんどくせえー」

「そう言いながら携帯を出すな！というより結局録音してたのか！」

「いや、なんか面白いこと言いそうだったから・・・」

「貴様、早くそれを消せ！」

「いやだ」

「く、分かった。僕も子供じゃない。今日の夕食のおかずで手を打とう。」

「いやだ」

「何故だ！いつもの貴様ならここで折れるはずだ！」

「いや、今回オレにも影響があったから。」

「・・・分かった。貴様この前欲しい本があると・・・」

「よしそれを買うことで手を打とう」最高の条件だ！！！！！！

「貴様は本当にこの話に弱いな・・・」

「ほっとけ。よし、じゃあ今日買ってくれ」

「分かった。では麗華お嬢様などに許可をもらって放課後に行こう」

「お前の場合は麗華といたいただけだろ」

「ちちちちち違う！」・・・分かりやすいやつだ。

「ほら、もうこんな時間だ。早く食っていくぞ」

「分かってる。僕に指図・・・」

「いいから食べ」オレはパンを尊の口に突っ込む。

「wwwwwwww」尊が何か言ってるが気にしないことにした。

.....

「いつてらっしゃいませ。麗華お嬢様、彩お嬢様、宮川様そして僕」

「誰が僕だ」そんなことを言うツキに見送られ、オレたちは学校に向かった。

日常2（後書き）

疲れました。正直ネタを考えるのがこんなに難しいとは思いませんでした。

全国の作者さんすいませんでした。

非日常（前書き）

やっとプロローグの続きになった・・・

非日常

ツキに見送られて、数十分後。オレらは憐桜学園高等部に到着した。車ならすぐに着くのだが徒歩での登校が麗華のスタンスなので仕方がない。郷に入れば郷に従えつか・・・めんどくさいな。

「あなたは、そんなことまったく気にしてないでしょ。」
まったく人のモノローグを勝手に読むのが好きなお嬢様だ・・・

「あいな、モノローグばっか読んじゃうと物語成り立たないぞ。」

「は？何の話してんの、あなた。どっか頭でも打った？」

「そうだぞ、海斗。僕も何の話をしてるのか、分からないぞ。」

「・・・何でもない。気にすんな。」

オレの扱いひどいな・・・いつものことか。
そんなことを思いながら教室に入り、しばらくすると・・・

「みんな〜おっはよ〜」

などと能天気な挨拶をしつつ柵 朱美が入ってきた。

この女は外見はなかなかだから、恋愛できない男子にとってはアイドル的存在である。

だが、この女、オレに対してだけ冷たい殺気を送ってくる・・・
まったくくっつい奴だ。

「は〜い、出席とりまーす。」

？おかしい。いつもより殺気が少ない。とオレは感じた。

授業はすべて終わり、放課後になった。

「帰るわよ。」

と何故か不機嫌な麗華と一緒に帰ろうとした時、

「朝霧くん。ちょっといいかしら」

と朱美に呼ばれた。

「・・・でオレはどうすればいいんだ。」

オレは朱美に尋ねる。

「どうするも何も、テストでいい点取って、バッチを取られなきゃ

OKよ。」

・・・なんか一つ条件が増えてるが、まあいいか。

「テストっつーのは、筆記も入れるのか？」

筆記が入るとかなりきつくなる。

「うん。筆記はそこまで重要じゃないわね。でも実技は、いい点取んなきゃ、アウトよ」
「一つ一つの動きや言葉がうざい……」

「はあ……分かった。で、バッチっていつのはいつまで守ればいいんだ」

「ん？バッチはずつとよ。バッチを取られたら問答無用でクビよ」

「ちなみに麗華には……」

「さっき言つといたわよ」
「通りで不機嫌だったわけか……」

「分かった。じゃあな」
とオレは朱美に背を向け麗華の元に向かった。

「うふふ。今回はとっても厳しいから覚悟してね、朝霧君……」
誰もいなくなつた教室で朱美は静かに笑っていた。

「で、あんたどうするの？」
帰る途中いきなり麗華が尋ねてきた。

「何がだ」
オレはあえて何も言わない。

「分かつてるでしょ。テストのことよ、あんたこのままだとクビになるわよ」
「珍しく麗華が本気で怒っている。」

「まあ、どうにかなるさ」

「どうにもなるわけないでしょ！あなたの実技は下から5番目、そんなあなたが急に勝てるわけないじゃない！」

麗華の目に水滴があるのを見て、オレはだまってしまう。

「だまってるだけで何か言いなさいよ……」
麗華の言葉にだんだんと覇気が無くなっていく。

……どうするかな。

この生活はなかなか良かった。
毎日が新鮮だった。

そんなのは当たり前だ。一年前までは、あの腐った場所にいたんだから。そう、こんなの当たり前だ。

でもツキや尊や彩、そして麗華……

オレはこいつらと離れたくなかった。

……なんなんだろう、この感情は。

オレは隣でうつむいている麗華を見た。

「なあ麗華。」

ああ、そうか。

「オレのことが必要か。」

オレはこいつらと一緒に居る時間が楽しくて、

「当たり前前よ！あなたは私が選んだボディガードなんだから！」

こいつらが、好きだったんだ。

「分かった。なら少しは頑張るとするか。」

オレは麗華に笑いかける。

「何よ、そんなこと言っというてクビにでもなったら、ただじゃおかないからね！」

麗華は無理に笑う。

「心配するな。」

オレは麗華にそっくり、二人で屋敷に戻った。

「……さっきはあんなこと言ってたけど、あんた本当にどうするのよ！」

屋敷に戻り少しすると、冷静さを取り戻した麗華が詰め寄ってきた。

「何がだ」

オレは本を読みながら返事をする。「」

「あんなね……本を読む時間があれば少しは鍛錬しろ！！！！！！」

麗華にベッドの上から引きずり下ろされる。

「大丈夫だって。」

オレはベッドに戻りながら言う。

「・・・あんたって一体何モンなのかも分からないから、実技もどのぐらい駄目なのかも分からないのよね。」

麗華はあきれながら言う。

そこに

「麗華お嬢様。神崎様と倉屋敷が玄関に訪ねてきてます。」
とツキが報告する。

「?あいつら何のようだ」

オレはカーテンを開けながら言う。

「さあね」

オレと麗華はそっぴいながら玄関に向かった。

「おい、海斗！麗華お嬢様のボディガードクビになるって本当か！？」

外に出た所に侑祈が迫ってきた。

「ああ。次の実技で悪かったらクビだってよ」
オレは平然と言う。

「まったく・・・だから少しはテストは真剣に受けろって、あれだけ言ったのに。」

薫が呆れながら言う。

「何、南条。海斗ってテストで本気で受けてないの？」
少し期待しながら麗華が尋ねる。

「確かに海斗は本気を出してはいませんが、所詮本気を出していてもあまり変わらないでしょう。」

といきなり会話に参加してきた、お調子者の尊が来た。

「誰がお調子者！……！！……！！」

……こいつも人の心を読むようになってきた。

「おいおい、なんでそんなこと言い切れるんだよ。」
オレは自信ありげに……

「海斗だから」

「海斗だし」

「海斗だしなあ」

……言えなかった。

「はい……すいませんでした。」
思わず謝ってしまう。

「まあいいや。オレちよつとトイレ。」

オレはそついいいその場を脱出した。

この場はオレにとって不利すぎると悟った。

「あいつ、あんなんで大丈夫かしら。」
麗華がつぶやく。

「結構厳しいと思いますよ。麗華お嬢様。」
薫が厳しい顔で言う。

その場でみんなだまってしまふ。・・・と思いきや

「ふっふーん。これでどちらがエリートかはつきりしたわね。」
などと妙がKY発言をし始めた。

「・・・チンクシャKY」
と侑祈がボソツと言う。

「なんとも言いなさい」
と麗華にも言われ、妙は一瞬で落ち込んでしまふ。

「すみません。少しいいですか」
珍しくツキが会話に口を出した。

「南条様か宮川様などの中で、そこから二階に上られる方はいますか？」

と指でさしながら言う。

「何を言ってるの？ツキ」
と麗華が驚きながら言う。

「それにこの高さでは登るにしても少し時間がかかりますね。」
と薫が冷静に判断する。

皆、ツキがいきなりそんなこと聞くことに驚いていた。

「何故そんなことを聞いたんだ？」
尊が聞く。

「いえ、この前に麗華お嬢様らの誕生日会の時、海斗は私がすぐに二階に来るように言ったら、そこから難なく登ってきていたので、皆さんでできるのかと思って、それを聞いて他の奴らは啞然とした。」

「ここを・・・？」

「難なく・・・」

「登った？」
みんなついつい見上げてしまう。
高さはかなり高い。正直薫らでも登るのに時間がかかりかかってしまっただろう。

「ツキ・・・その話本当？」
麗華が尋ねる。

「はい。海斗はだまって欲しいといっていましたけど・・・どうもおかしいのです。実は私よく海斗の部屋に遊びに行くのですが、海斗の奴こっそり筋トレしてるんです。しかもかなりの量を。しかも、毎朝ランニングしてますし。それで実技が下から5番目というのはどうも信じられないんです。」
とツキは海斗のことを疑いながら言う。

「・・・」

麗華たちは明らかに焦っていた。

今まで見ていた海斗がまったくそんなことしている素振りを見せなかったから、麗華たちの中で海斗という人物像が変わり始めていた。

「海斗・・・あんたって一体・・・」

非日常（後書き）

疲れました。急いで書いたので誤字などがあつたら感想に書いてください。

文章が下手ですいません。

刺客（前書き）

CapLockが壊れて打つのに「苦労・・・」

刺客

トイレから戻ると、なんだが重い雰囲気だった。だが尊を茶化してなんとか空気を和ますことに成功した。

「じゃあ俺たち帰るわ。海斗、あんまり麗華お嬢様に迷惑かけるなよ」

「それって、ボディガードにとって当たり前でしょ」
麗華が呆れながら言う。

「まあ、迷惑かけられてるのは俺の方だけど」

「へーいつ私がそんなことした」
麗華に睨まれる・・・蛇に睨まれたネズミの気持ちがあった気がしたがそんなことで折れるオレではない

「麗華の部屋に行ったら、一人でこっそりバストあ・・・」

「その減らず口を閉じろ！」
麗華の腰の入ったストレートが顔面に入る

「ふみまふえん」(すいません)

「海斗の醜い顔がさらに醜く・・・」
ツキが平然と言う

「ふえいふあふえいだふあー！」(麗華のせいだろ！)

「いや、知ってますが」

「・・・こいつ、いつか犯す。つーか言葉通じてるし・・・」

「なんか大丈夫そうだな」

麗華たちが騒いでる様子を見て侑祈が言う

「そうだな、私たちは余計なお世話だったかもな」

薫たちはそう言い二階堂の屋敷を後にした

「あれ、南条たちは？」

「お前が騒いでる間に帰ったぞ」

ちなみにオレらはその後30分ぐらい言い争いをしていた

「麗華お嬢様、そろそろ日が暮れますので屋敷に戻りましょう」

「そうね」

ツキに言われ麗華はツキと屋敷に戻った

「さあて、オレも・・・ん？」

思わず後ろを確認する

「・・・殺気か」

殺気はオレに対してだった。

しかし対象がオレということバツチを狙う学校関係者かと思っただけがその線はすぐに消えた。

・・・学校関係者が資産家の敷地内で騒ぎを起こすはずがない、じやあ、こいつらは・・・

気配を探る

1、2、・・・5

5人か、しかも気配の消し方が素人ではなかった

海斗は相手が弱者ではないと悟った途端動き始めた

(ここでは被害が出る可能性がある・・・)

海斗は広場に向かった

海斗が走るのを止めると、すかさず五人の男たちが海斗を囲った

(随分と慣れている・・・つまりこいつらはチームか、厄介だな)

既にこの時には海斗は、この男たちの身元が分かっていた

気配の消し方、海斗の走りにびったりついて来るほどの身体能力の高さ

(・・・禁止区域か)

「よう、朝霧海斗。まさかこちらの世界で再開するとはな」

一人の男が海斗に呼びかける

その男は海斗に見覚えがあった

「・・・何故お前らがここに来れた」

そう、海斗が疑問に思ったことは一つ

ここは様々な資産家が集まる高等区である
大勢ならまだしも、この少人数で警備を突破できるわけがない

「そんなことどうでもいい、だってお前はここで死ぬのだから」

男は素晴らしい海斗に向かって襲い掛かってきた

男は正確に海斗の顔面に殴りかかる

「甘いな」

ありきたりな言葉だと思いながら、海斗は上体をずらすことで攻撃を避け、男の足を払う

「ぐあー！」

だが禁止区域の連中はこの程度で獲物を逃がさない

男は倒れる前に海斗に掴みかかるようにする

だが、そのことを分かってたように海斗はそれを避け、男の顔に膝蹴りを放つ

「があああああああ！」

男は顔を押しさえながら、倒れこむ

「まだまだ！」

さっきのに比べ小柄な男がナイフを持つ右手を振り下ろす

「ちっ」

海斗はすかさずバックステップでそれを避けるが

「甘い！」

避けた先にいた男が海斗の背中に強烈な蹴りを浴びせた

「うっほっ！」

海斗の肺から一気に空気が押し出される

その様子を屋敷で見っていたものがいた

「海斗！」

麗華を思わず叫んでしまう

麗華は焦っていた、男たちは麗華から見ても一目で強者と分かる、問題は何故その男たちが海斗を襲っているのか理解が出来なかった

「とにかく、早く助けないと！」

と玄関に向かう麗華を

「お待ちください、麗華お嬢様」

佐竹が呼び止める

「何、佐竹！それより早く海斗を助けたらどう！」

麗華が佐竹に怒鳴る

「申し訳ありませんが、私が行った所で海斗の邪魔になるだけです」

佐竹は麗華を突き放すように言う

「何言ってるの！？海斗の実力か・・・」

「麗華お嬢様が海斗の何を知ってるかというのですか、見ていてください。．．．あれが本当の海斗です。」
佐竹がうつすらと笑みを浮かべる
そんな佐竹を見て麗華はぞくりとした。笑みを浮かべる佐竹はまるで楽しみを見つけた悪魔のようだった。

「．．．」

海斗は男に蹴られたままうずくまっていた

「どうした、朝霧。今の一撃でどっかイっちゃったか」
男たちは笑う

「．．．くくく。そうだ、そうだったな」

そんな男たちに構わず海斗は笑みを浮かべた

「あっちの世界はこうだったなあ．．．」
海斗は思い出すように笑い出す

「なあ、お前ら。悪いが久しぶりだから手加減できない．．．殺したって恨むなよ」

立ち上がった海斗から殺気が放たれる
さつきまで笑っていた男たちの顔が引きつる

「何言ってるんだテメエ！」
小柄な男がナイフを振る

「……………」

海斗はその手を平然と掴み捻る

「ぎゃあああああああああ！」

男の顔が苦痛に歪む

その顔を見て、海斗は嘲笑う

「オレも低く見られたもんだな」

そう言い男の手を捻り潰し、男を蹴り飛ばす
そんな様子を見て、男たちは半狂乱に陥った

「ああああああああああああああああああああ」

男たちは全員ナイフを出し、海斗に襲い掛かる

「…………所詮は出来損ないか、まあ一年前までオレもそうだったが」

一人目の男の攻撃を避けると二人目がナイフを海斗に突き刺す

「があああああああああああああああああああ」

一人目の男から悲鳴があがる

海斗は一人目の男を壁にしていた

「ほらよっ」

海斗は壁にした男を押す

男に刺さったナイフはさらに深く刺さる

そんな仲間の様子を見て、二人目の男は固まってしまふ

「ボーっとしてて良いのか」

男は海斗の声を聞き焦って声のしたほうに振り向くが
その先には海斗のストレートが待っていた

「ごほうっ！」

男はそのまま崩れ落ちる

海斗はもう一人に襲い掛かる
完全に立場は逆転していた

そんな仲間がやられる様子を見て残った男は逃げ始めていた
(何がこの世界に来て弱くなっただよ！どこが、どこがだよ！)
男は依頼主の顔を思い浮かべながら必死で逃げる・・・が

「おいおい一人だけ逃げんなよ」

と聞こえたくなかった声が耳に響く

「ひっつい！」

男は後ろを振り向こうとした時
ドスっ

と自分の足から鈍い音が聞こえた

男は様子を確かめる前に倒れてしまう

・・・男の足にはナイフが刺さっていた
後ろから足音が聞こえる

「ああああああああああ」

足を怪我した男はそれでも足をひきづりながら逃げようとする

「さて、人のこと襲ったお仕置きの間だ」

と海斗が笑みを浮かべるのを最後に見て男は意識を失った

「しまった・・・誰が依頼したの聞くの忘れてた」
と静まりかえった屋敷の庭で一人つぶやく海斗であった

「なんなのよ・・・なんなのよあいつは!？」
その様子を見ていて麗華が抱いた感情は一つ、恐怖であった
いつもあんなへらへらした奴が人を傷つけることに容赦がなかった
そう思うだけで麗華は震えてしまう
そんな麗華を見た佐竹は

「最後に聞きます、麗華お嬢様。あなたは本当に海斗のことが知り
たいですか」
と尋ねた

そんな冷たい佐竹の言葉に麗華はうなずくことが出来なかった。

刺客（後書き）

一回書いてる途中にデリートしちゃって急いで書き直しちゃったので変なところもあると思いますが許してください!!!

変調（前書き）

更新遅れてすいません

後一部キャラ崩壊ありますんでお気をつけください

変調

戦闘を終えたオレは、倒した奴らを佐竹に任せ、屋敷に戻った。部屋に戻るうとしたところで、今一番会いたくない人物に遭遇してしまった。

「よう、麗華。こんなところで何してんだ」
・・・さっきの戦闘を麗華に見られてしまったことは、佐竹から聞いている。

オレはどうせ問い詰められるだろうと思い、回避策を練ろうと思っ
たとき、

「っ！！！何でもないわ」

と麗華はオレの顔を見て、一瞬睨んだかと思ったらそのまオレの隣をすり抜け、自分の部屋に戻ってしまった。

オレはそんな麗華の様子を見て、驚きを隠せずそのまま立ち止まっ
てしまった。

「おや、こんなところに醜い石像が！？っっ！なんて醜いのでしょ
う・・・」

しかしこのスーパー掃除姫ことツキちゃんに不可能はない！・・・
ってことでまずは除菌をー」

「オレは細菌か何かか！？」
オレが呆けてる間に今一番話したくて、一番出方が最悪なツキが近
くまで来ていた。

しっかし本当に気配を感じない。まったく恐ろしい奴だ。

「まあ、いい。それより、ツキ。さつき麗華に会ったんだが、何か様子が変だなんだが、何か事情を知らないか？」

「・・・麗華がこの屋敷で一番信頼しているのはツキである。だからツキであれば何か知ってると思うたが、

「いや、分かりませんね。私も屋敷に戻ってから、麗華お嬢様にお会いになってませんから。」

ダメか・・・

「分かった。そしたら、この後の麗華の様子を見といてくれ。」

「分かりました。・・・しかし珍しいですね、海斗が麗華お嬢様を心配するなんて」

「まあな。」

オレはそう適当にはぐらかすとツキに背を向け、自室に戻っていった。

コンコン。

控えめなノックが聞こえる。

「麗華お嬢様、ツキです。」

「入って。」

「失礼します」

そついいながらツキは部屋に入ってきた。

「しかし麗華お嬢様、こんな時間にどのような用ですか？」
そう、時刻は真夜中の0時、いつもなら寝ている時間だ。

「すまないわね。少し考え事をしてたら、呼ぶのが遅くなっちゃってね・・・」

「考え事ですか・・・」
ツキが眉をひそめる。

「別にあなたが気にすることはないわ」
私はツキの思考を中止させる。この娘は勘がいいから、気付いてしまっただろう。

「それよりツキ、今日私たちが屋敷に戻ってから何が起きたか知ってる？」

「はい。禁止区域の人間が高等区の警備を抜け、この屋敷に侵入したことですよね」

「そうよ。じゃあ、その禁止区域の手練れ共を撃退したのは誰か知ってる？」

「え、それは数のあるボディガードで撃退したと思ってましたけど違うのですか」

私は頷く。

「そいつらを倒したのは・・・海斗一人よ」

それを聞いたツキは一瞬驚いた顔をしたがすぐに納得したような顔をした。

「あら、あまり驚かないのね」

「ええ、なんだか海斗だったら本当にやってしまいそうで・・・」
とツキは頬をかきながら言う。

「随分と海斗を買ってるのね」

私は苦笑しながら言う。

ツキは何だかんだ言って海斗のことを信賴している。

「いえ、そういうわけでは・・・それより何故麗華お嬢様は海斗がやったと言い切れるのですか？」

「・・・見てたからよ」

「そう・・・ですか。そのお、どうでした海斗は？」

ツキは心配そうに言う。

「正直に言うと化け物ね」
ツキの呼吸が一瞬止まった。

「・・・それは、どういうことでしょうか」

「どうもこうもないわよ。禁止区域の人間に対して、圧倒的。しかも最後の方は向こうが怖気ついて逃げようとしたくらいよ。これなんで成績がビリなんだか・・・」
私は大きく息を吐いた。

「何か事情があるのでしょうか」

「そんなこと分らないわよ。・・・あいつのほとんどが秘密のよ
うなもんだしね。」

そこでツキは何かを思い出したかのような顔した。

「そういえば、海斗が麗華お嬢様の様子が変だと言っていましたけど・・・どこか具合でも悪いのですか？
ツキが心配そうに尋ねてくる。

「・・・大丈夫よ。ただ、」

麗華はその問いに少し顔を歪めた。

「ただ？」

「侵入者を倒す時の海斗は見ていても怖かったのよ。・・・いつもあんなおちゃらけてる奴が戦いになった瞬間とても冷酷になつてて・・・仕方が無いことって分かってるつもりなんだけど、あいつが人を傷つけてるところをみると何故だか怒りがわいてきて・・・

あいつのこととなりつけてやるうと思っただけど、途中で何してるんだろう私って感じになって・・・」

麗華はそこで俯いてしまう。

そんな麗華にツキは静かに近づき、麗華をツキはやさしく抱きしめ

「麗華お嬢様はただ優しいだけです。そんなことを思つのも麗華お嬢様が海斗のことを大切に思ってるからです。私はそんな麗華お嬢様が大好きです。だから、麗華お嬢様も一人で抱え込まないで私に相談してください。」

麗華はその言葉に驚き目を大きく開くが、すぐに安堵したような顔を浮かべてから少し涙を流し、

「そうね・・・」

と小さくつぶやいた。

変調（後書き）

できれば感想をいただけるとありがたいです

崩れ行く平穩（前書き）

1万PV御礼！

まさかSSでこんなに読まれるとは思いませんでした。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

崩れ行く平穩

禁止区域の連中から襲われて、一夜が明けた。

屋敷の人々には、オレが倒したとは知られていないらしい。まあ、オレにとつちや好都合だが・・・

麗華も様子がおかしかったが、朝にはいつもの毒舌を存分にオレに發揮してたから問題ないだろう。

・・・多分ツキが上手いことやったのだろう。今度ポテチを買ってやろうとオレは心の中で思った。

「・・・なに、ニヤニヤしてるのですか、この駄犬または居候。」「・・・やっぱやめることにしよう。こいつに感謝したくないというか、した瞬間今以上にひどい扱いになることが目に浮かんできた。

「いつも言ってるが、気配を消して部屋に侵入すんな、この年中発情メイドが！」

オレはオレのベッドの横に立っているツキに言う。

「え！？海斗が発情！？ま、まさか海斗の性欲がこれ以上増えるなんて・・・」

「いや、お前だから！つーか素晴らしいながら携帯で3つのボタンをプッシュするな！」

とツキの携帯を取り上げながらオレは言う。

「ちっ、ばれましたか・・・ピュッピュ」

「・・・でツキさんあなたは一体何をしてるんでしょうか」

「え？ああこれはどこかの居候が早く出てかないかなあと思って食塩水を水鉄砲につめて、嫌がらせをしてるだけですけど。何かご不満でもありますか？」

.....

「大有りだわ！！！！！！！！！！」
と朝っぱらから、大声で叫んでしまつ。

「そして、目にしみる！！！！」

.....

ツキとの激闘の後、オレは普通に朝食を取り、麗華といつてもどおり徒歩で学校に向かった。

「しかし、あんたとツキって本当に仲良いわね」
と突然オレの隣にいる麗華が言う。

「.....お前の目は大丈夫か？一回病院行って身長のこと」

「今、身長は関係ないでしょ！」

ドスつといい音を出しながら、麗華のアップーがオレの顎をとらえる。

オレと麗華はかなり身長差があるため、これが綺麗に決まるのであ

る。

・・・しかし、オレも最近慣れたらしくて、すぐに回復してしまうため、ついまた・・・

「悪い、間違えた。胸のこと」

「それも今関係ないでしょ!!!!!!」
キーン・・・と綺麗な鐘に後が聞こえた気がした。

・・・ごめん。前言撤回・・・絶対に慣れない。というか慣れちゃいけないだろ、、
と、オレは麗華に全力で蹴られた男の象徴を抑え、悶絶しかけながら思ったのであった。

しばらくすると少し前に麗華がさらわれた辺りをいつもどおりオレと麗華は通りかけていた。
が、オレはそこでいつもと違う街の様子に気がついた。

(監視されてるな・・・)

オレは自分らが監視されていることに気付いた。

(殺気はない・・・ということは学校のテストか・・・いやそうでもない奴もいるな)

とオレは冷静に判断した。

「ちよつと、どうしたのよ」

急に黙り込んでしまつオレを見て、麗華はオレに話しかけてくる。

「・・・いや、何でもない」

オレは麗華に言う。

(今日は来なさそうだな・・・ったく、もう少し殺意抑えろって)とオレは路地の方を見る。

・・・どうやら、奴らが先走りそうだな。

「麗華、少し離れる」

「はっ？何言つてんのあんた？」

「・・・どうもごもお客様だよ」

オレはそう言いながら麗華を自分の背に隠すようにする。

敵は路地から近づいてくる。

人ごみは朝のため、そこまでない。

男たちを見て、麗華はようやく状況を理解したようだ。

「海斗……」

「なんだよ」

こんな時に麗華はオレに話しかけてくる。

「……無理しないでね」

と後ろから、小さな声で聞こえた。

……

「まあ、見とけて。オレこう見えてもボディガードだぜ」

「……ほんとに都合良いわね、あんた」

麗華は珍しく微笑して、オレから少し離れた。

敵は3人。おそらく禁止区域も奴らだろう。

オレとの距離が10m程になると、向こうから仕掛けてきた。

3人は何も考えないで突っ込んで来た。

しかし、腐っても（すでに腐ってるが）禁止区域の住民、目には殺意があり、手にした、拳やナイフに加減がない。

「くらえっ!」

真ん中の男が顔をめがけて殴ってくる

「朝からよくやるぜ……」

とオレは眩きながら、男の拳をかわしながら、他の二人の様子をさぐる。

どうやら、二人は真ん中の男のサポートのようだ。

「ッシー！」

しばらく男の攻撃を避けたオレは攻めてくる男の隙を見つけ、足を払う。

男の体勢が傾くと同時にオレは空いてる手で男の腹を抉るように殴る。

「ぐっお・・・」

男はその一撃でのびてしまう。

呆気なく倒される仲間の姿に残った二人は驚くが、すぐに意識をオレに戻した。

二人は一斉にオレに襲い掛かる。

よくペアを組んでるのか分からないがこの二人は息があっている。

一人の隙を見つけて、攻めようとするが、もう一人に阻まれる。

男の横に薙いだナイフがオレの制服をかする。

何度かそんな攻防を繰り返した後、オレは覚悟を決め、二人に突っ込む。

オレに向かって薙いだナイフを避け、男を殴り飛ばす。

その瞬間、横腹に衝撃が来るが、我慢する。

すぐに、もう一人に方を向き、オレの横腹に食い込んでいる男の右腕を掴み、殴られた痛みと恨みがてらに男の腕を曲げ、関節をはずした。

男はあまりの痛みに気絶してしまったようだ。

戦闘がはじめて5分後には、3人の男が歩道にのびていた。

「ふう、終わったか」

とオレは息を吐き出す。

「お疲れ様。」

と少し離れたところで見ていた、麗華が戻ってきた。

「しかし、あんたこんなに強いのに何で成績が悪いの・・・とういうか手を抜くの？」

麗華がもつともなことを尋ねてくる。

「まあ、ちよつとな」

あーやべ。また怒られるなどオレは思ったが、

「・・・まあ、あなたが話したくないならそれは聞かないでおくわ。」

と予想外な言葉が麗華から発せられた。

戦闘も終わって、つい緊張の糸が緩んでいたオレは、

「・・・こんなこと言うなんて、お前麗華の偽者だな！」
と言ってしまった。

「何でそうなのよ！」

ズビシっ！と麗華の腰の入ったストレートが顔面に決まる。

・・・教訓

麗華の攻撃は禁止区域の拳よりはるかに痛かった・・・

崩れ行く平穩（後書き）

あー、今回もまた戦闘シーンを入れてみました。
やっぱ、難しいですね。

えーと、変な点とかがあったら教えてください。
感想も書いて頂くとありがたいです。

鬼畜と書いて麗華と読む (前書き)

亀更新乙!

・・・はい。すみません。・・・でもこれ性分なんです!

・・・いやまじでほんとにすみません・・・

鬼畜と書いて麗華と読む

禁止区域の連中を倒したオレらはオッサン（源蔵）と麗華専属のSPさんに連絡をした後、そのまま学校に向かった。

「あれ、麗華遅刻？もしかして寝坊しちゃったとか。」
と教室に入り早々、妙が麗華に絡んできた。

「ふん。あんたと違って私がそんなことするわけないでしょ。今日は朝いろいろあったのよ。」

・・・さすがは麗華と言うべきなのだろうか？

見事に妙を鼻で笑い、その姿を見下す態度（身長的には無理だが・・・）、麗華と妙どちらがお嬢様らしいかというと、圧倒的に麗華である。

「ぐっ！」

と、そんなことを考えていると麗華に足を踵で踏まれていた（笑顔で）、まあ、何故踏まれたかは分かっているが・・・こいつ実はエスパーだったりして。

「っと、アンタをからかってたらもうチャイムが鳴っちゃったは、まったく私としたことが時間を無駄にしたは。」

「っ！……なによ、私より小さいくせに！」

「あっそ。それしか言えないのに、よく恥ずかしもなく言えるわね。」

「ただいまのオレの心境は『もうやめて！妙のHPはもう0よ！』って感じだ。」

それぐらい麗華の一つ一つの言動が妙の心（HP）を抉っていく。
・・・見ているこちらが、痛々しくなってきた。

「なあ海斗。」

そんな様子を見た侑祈は冷や汗を垂らしながらオレに話しかけてきた。

「もしかして、今日の麗華さんは・・・」

「ああ、今までにないほど絶好調だ・・・」

とオレと侑祈は麗華による一方的な攻撃を遠い目で見ていた。

その頃、ある場所では……

「ええ。計画は予定通りで……はい。分かりました。

では、指定の日の場所には人がこないように……はい。よろしく
お願いします。」

一人の女性が電話をしている。

「はい。決行日は○日の○時で。では私も人を集めますので……」

「ふふふ、朝霧海斗……あなたの命は高く付きそうね。」
電話が切れると同時に女は笑い出す。

もはや、自分の勝利を確信してるかのように……

鬼畜と書いて麗華と読む (後書き)

短いです！

まじで申し訳ないっす！

・・・え、そんな風に見えないっすか？

でもこれ性分なんっす！

・・・すみませんっす！

暗雲（前書き）

最近ネギま！のSSをよく見ますが・・・やはりあれですね。
アンチの作品は良いですね・・・見ててスカッとなります。

え？関係ないって？

き、きつと関係あるはずさ！

暗雲

暗い道・・・夜、ではない。
ただ光がないだけ。

そう

これが当たり前。

「禁止区域」では・・・

私は暗い道を歩く。

周りは廃墟といって良いほどの家が所々にあるぐらいで、後はゴミだけ。

少し歩くと目的の場所が見えてきた。

建物の中に入るとそこは100人ほどの私の仲間がいる。

これだけいれば、あいつを・・・

「それではこれより、実技試験を行うー!!」

「まずは腕立て300回!・・・はじめ!」

今から起こることは、この中では誰も知らない。

「仕方がないが、少しはマジでやるか」

「か、海斗が試験にやる気をつ!まさか海斗にもついにボディーガードになるこー!」

「てめえは何でそう話を直結させるんだ、つーかこっちの事情知ってんだろ」

「ああ、そういえば・・・」

「お前ホントにロボットかよ・・・」

「何か言ったか？」

「いや・・・あ？・・・っち、靴紐が切れやがった」

「おいおい、大丈夫かよ。こんな日に切れるってお前相当運ないな」

「うるせえ」

一部の人間はこの瞬間に憎悪に身を委ね、また一部の人間はこの先に希望を持つ。

それは交わることは絶対にできない、悲しい話。

青年たちと少女たちはどうその事実を受け止めるのだろうか・・・

暗雲（後書き）

なんかシリヤスっぽくしてみた。

・・・後悔もして、反省もする。
ただ一言言わせて欲しい。

挑戦して見たかっただけだ・・・

認め合う者たち

「281、282、283……296、297、298、
299、300!」

海斗は勢い良く立ち上がった。

「なんと……どうしたんだ朝霧。お前が1番だなんて……」

いつもとは段違いの海斗の成績を見て、思わず監督官は顔を顰める。それもそうだろう。常日頃からさぼった風にしか見えなく、成績を見てもビリに近い。

そんな劣等生がいきなり一番ときたら、驚かない方がおかしい。

「まあ、頑張ったからな。……それで俺はどうすれば良いんだ？ 監察官が思考している間、海斗は競技場のど真ん中に立たされっぱなしである。」

「……何があつたかは知らんが、お前が一番なのには代わりはな
いか。……腕立て伏せ300回、一番。朝霧海斗！」
監察官がそう宣言すると競技場に動揺が起きる。勿論、腕立てをし
ながらであるが……

「朝霧はもう休憩をしてよい。次の競技になるまで時間があるから
な」

「そりゃ、ありがたいな。じゃ」

海斗は自分に注がれる疑惑の目などをものともせず、悠々と競技場
を後にした。

海斗が休憩所に移動するとそこには朱美がいた。

「お疲れ、朝霧君。どうしたの？一番だなんて、愛しいあの娘のために一肌脱いだって感じ？」

いつもの嘘くさい笑みを浮かべながら、朱美は話しかけてきた。

「だったら、なんだ。それにけしかけて来たのはそっちからだろう」
海斗は朱美に構わず、そのまま休憩所に歩みを進める。

「もう。あいかわらずつれないな」朝霧君は。そんな朝霧君にはこのスポーツドリンクをあげません！」

朱美は足元に置いてあったクーラーボックスを開け、ペットボトルを見せ付ける。

勿論、海斗はそんなものを無視して進み、去っていった。

「っち。素直にあげれば良かった・・・いや、そんなのではつまらないわね・・・もっと彼には苦しんでもらわなきゃね」

海斗が去った後、朱美は薄く笑みを浮かべた。

「海斗」

海斗が休憩所で待っていると数分して侑祈が現れた。

「随分遅かったな。」

「いや、いつも通り手加減してたらいつの間にか海斗が終わってたから急いで終わらして来たんだよ。」

侑祈が面目なさそうに言う。

実際、侑祈というロボットが本気を出せば、海斗の記録など余裕で抜かせるだろうから海斗は「そうか」

と言い、侑祈が手にした物に目を向けた。

「ああ、これ？これは朱美先生が俺のために冷やしてくれてたスポーツドリンクな」別に侑祈のためじゃないと思うよ」「・・・酷くない、薫？」

侑祈が自慢げに話していると、丁度やって来た、薫が口を挟んだ。ちなみにその後ろに尊もいる。

「そういえば海斗。随分と早かったね、・・・あれ？海斗は飲み物を朱美先生から貰えなかったのかい？」

薫は海斗の成績を然程、気にせずに話しかけてきた。

「ああ。あいつが俺が生意気だからあげないだよ」

海斗はどうでもよさそうに答えると、薫は「そうか」と苦笑しながら言った。

「そういえば、尊。海斗に一番取られたのに黙ってるなんて、どうしたんだよ」

侑祈はそう尊に聞いた。海斗もそういえば・・・といった感じに尊の方を見る。

侑祈から聞かれた尊は、目を閉じて黙っていたが、少しすると

「認めたくはないが、ここ最近の海斗を見ると納得できてしまうんだ。」

と話した。

「ここ最近と言つと？」

薫が尋ねる。

「麗華お嬢様の家のメイドに海斗の二階に登った話を聞いてからだ」

海斗は何の話か分からないが、他の二人には通じたようだ。

「あれから海斗の様子を僕なりに窺ったんだ。・・・で分かったことは薫のように手を抜いているということ。そして僕はある夜、海斗が家に侵入してきた者共を倒したの見て確信した。」

「・・・海斗は最低でも、僕より強いということだ。」
悔しいがな・・・と言いながら尊は言った。

正直、海斗は尊が侵入者との件を見ているは思ってたからかなり驚いた。

薫や侑祈も違う所で同じくらい驚いてたが。

「どうしたんだよ、尊。お前頭でも打ったのか？海斗のことをそんなに認めるなんて。」

侑祈は驚きながら尊に聞く。

「・・・そのぐらい圧倒的だったんだよ。海斗と侵入者たちの闘いが。」

尊は海斗を見ながら言う。

「海斗の実力を見抜けなかったのは僕の実力が不足してたからだっただよっだ・・・すまなかった。」

海斗たちが見る中、尊は海斗に頭を下げた。

「尊、そんな風に自分を卑下すんなって、俺も海斗の実力をそこまですれなかったんだから。」

「私もだ。まさか尊にそこまで言わせる程の実力が海斗にあったとは・・・。」

侑祈と薫は驚きながら海斗の方を見る。

「・・・まさか、尊に見られてたとはな。」

海斗は苦笑しながら尊に頭を上げるように言う。

尊は頭を上げ、海斗を見る。

「いや、たまたま窓から見えただけだ。・・・麗華お嬢様を探してたらな。」

「何で探してたんだ？」

海斗が尊に聞く。

「いや、本当に海斗に何かされてないか尋ねにな・・・」

尊は海斗から目を逸らす。どうやら少なからず罪悪感はあるようだ。

海斗は「はあ。」と一息つく。

認め合つ者たち（後書き）

もうムリポ。。。

襲来

海斗たちが試験を受けている間、別の場所ではある者達が息を潜めて合図を待っていた。

場所はある路地裏、薄暗い道の脇に大きな凶体をした男が二人いた。

「なあ、合図まだかよ」

と、見るからに不潔な褐色の大男はもう一人の大男に呼びかけた。

「話を聞いてなかったのか？開始は12時からだぞ。まだ、30分もある。少しは落ち着いてはどうか。」
話しかけられた大男はもう一人を落ち着かせようとするがなかなか言うことを聞かない。

「ああ、もうあの女は何してんだっ！確実に配置を間違えてるだろ！」
あまりに言うことを利かない男にもう一人の男もついに苛々し始めてしまった。

「もう・・・我慢できねえ。やっていいよな!？」
興奮が収まらない男に既にイラついてた男は

廃墟と化した建物から

そして

「・・・時刻より早いけど計画に支障はないわね。・・・さあ、みんな祭りの時間よ！！！！！」
とある学園の内部から現れた。

襲来（後書き）

短いけど・・・もうなんか鬱だ。
死にたくないけどしにてえ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2506n/>

暁の護衛～海斗の憂鬱

2011年10月18日20時59分発行